Management Club Report

Dec.2004/Vol.24

Monthly Opinion ≪新しいビジネスモデルを探る≫

■気になる表現「勝ち組」「負け組」

世に「勝ち組」「負け組」なる言葉が蔓延してきたのは一体いつ頃からでしょうか。勝ち負けで優劣を表現するというのは、スポーツにおけるゲームやレースでの勝利と敗北が一般的ですが、政治の世界でも選挙での当落を「選挙戦に勝った」とか「負けた」と表現したりします。またビジネスの世界では、「冬のボーナス商戦での勝利を目指して」などと言ったりします。

いずれも競争相手があり、その相手を「敵」と見立てて一定のルールに従った戦いを演じるわけですが、結果として勝者と敗者を作ることになります。それはあくまでも「勝者」と「敗者」であり「勝ち組」「負け組」ではありません。

「勝者と敗者」「勝ち組と負け組」この二つの表現の違いにはどのような差異が存在するのでしょうか。単発的な勝敗はそのときの「勝者」「敗者」であり、継続的な勝利を重ね、強い態勢が明らかになってきたときそちらを「勝ち組」他方を「負け組」と称するような感じがあります。つまり「勝者・敗者」は局地戦での優劣、「勝ち組・負け組」は戦いそのものの勝敗を表現しているような印象を抱きます。

しかし、「勝ち組・負け組」という表現はどうも好きになれません。何よりも語感に品位を感じることができないからです。低俗な週刊誌や小説本のようなイメージです。かつてバブル期に、降って湧いたようなあぶく銭を稼ぐ話を表現するのに「おいしい」という言葉が流行ったことを思い出しますが、実に下品で嫌な表現でした。それに類似した感覚です。

「勝ち組」には「常に勝利し続けるための公式を見出した」かのような驕りが感じられます。勝ち誇った傲岸不遜な顔と、計算高い怜悧な表情が浮かんでくるのです。また「負け組」からはどうにもしようのない敗北感と屈辱感、そして諦めが漂ってきてやりきれません。落ち込んで投げやりになった弱者の顔と、脇道にそれてしまったはぐれ者の顔が浮かんできます。

一方、「勝者・敗者」という言葉には文化を感じます。特に「敗者」の周辺には甘美なロマンティシズムが漂っており、「勝敗は時の運」と言う言葉に代表されるように、勝敗と言う結果が語るほどの実力差は無いという“判官びいき”の心情が心地よく渦巻いています。「今日は一敗地にまみれたが、明日は頑張れ」こんなエールを「敗者」には贈りたくなりますし、「敗者」からは新たなチャレンジに賭けようとする息遣いが聞こえてくるようです。

「勝者」と言う言葉もまた文学です。アンドレ・マルローは「勝者には何もやるな」と言いました。それは、「勝者には褒美も賞賛の言葉も不要であり、ただ勝利という事実があるだけで充分ではないか。今はただ孤独な勝利者の喜び